

みんなの図書館

発行日 令和3年3月15日(月) (年4回発行)

第62号



発行者 木更津市立図書館

木更津市文京2-6-51

TEL 0438-22-3190

FAX 0438-22-7509

今年度をふりかえって・・・

- * 電子図書サービス開始！
- * 図書除菌機・自動検温器の導入！
- * 2度の臨時休館！



令和2年度をふりかえると、世界中が新型コロナウイルスの出現により、日常生活が大きく変化した年でした。

この1年の木更津市立図書館ニュースベスト3も例外になく、このコロナ禍の影響を受けたものとなりました。

まずひとつ目は、電子図書サービスを開始したことです。

こんな今だからこそ、図書館に来館せずとも読書を楽しんでもらえることも必要ではないだろうか令和3年1月から開始しました。千葉県内では3番目の導入となりました。

ふたつ目は、安心して図書館を利用してもらうために、本を内外から除菌できる除菌機の導入や、入口付近へ自動検温器を設置しました。

そして最後は、図書館開館史上初であろう、長期にわたる臨時休館です。

1回目は令和2年3月7日から6月2日までの約3ヶ月間。2回目は令和3年1月21日から3月15日現在も休館は続いています。

文芸講演会や児童文学講座は中止や延期となり、おはなし会をはじめ夏休みの小中学生を対象としたイベントも取り止め、人が集うことができない1年でした。

その代わりに、ホームページで「やってみませんか？おうちでおはなし会」や「休館中の図書館の取り組み」として、情報発信を行いました。

図書館も立ち止まっているのではなく、ひとつでも多くのできることを模索し、図書館としての機能を失わないよう歩んでいきたいと思っています。

休館中の図書館、こんなことをしていました



臨時休館中の館内の様子をご紹介します。

詳しい内容は、ホームページに掲載してあります。

まずは、臨時休館に入ってからすぐに、2月下旬に予定していた蔵書点検を行いました。

館内と公民館13館、金田交流センターにあるすべての資料のバーコードを読み込み、パソコン上のデータと読み込んだデータの照合を行い、所蔵状態を確認しました。

バーコードの読み込み作業中に、本来あるべき書架ではない書架に資料があった場合は、分類番号を確認し、適正な書架へ戻す作業も行いました。



図書館の資料には、破損や劣化防止のため透明のフィルムカバーがかけられています。カバーをかけることで、抗菌加工やUVカットの効果もあるので、永くきれいな状態で保つこともできます。

通常はフィルムカバーが装着された状態で納品されますが、中には職員が1冊1冊カバーをかける場合があります。

写真は絵本にカバーをかけているところです。



図書整理も行いました。

書庫と公民館に配本してある図書を中心に、1冊1冊図書を開き状態を確認しながら、整理を進めました。

限りある書架を有効に使用するため、汚破損の激しいものや資料的価値の少なくなったものを、複数の職員で確認しながら廃棄作業を行いました。

廃棄された図書は、リサイクルフェアにて市民へ無償配布を予定しています。



木更津市公式 YouTube「きさらづプロモチャンネル」をご存知ですか？

今回、電子図書のプロモーションとして、図書館の職員と市公式マスコットのきさぽんが館内で撮影を行いました。

きさらづプロモチャンネルでは、市からのお知らせをはじめ、自宅でできる体操などさまざまな動画が発信されています。

撮影した動画は今月中に公開予定です。

きさらづプロモチャンネル





わたしと図書館



木更津市立図書館の窓口にいる人と言えば、写真のおふたりが思い浮かぶ利用者も多いのではないのでしょうか。司書として、永野さんは46年、鎌田さんは26年にわたり図書館にご尽力をいただきました。そんなおふたりが今年3月末をもってご勇退されることになりました。そこで、特別企画として、おふたりに図書館での思い出や図書館への想いをインタビューしました。

以下、永は永野さん、鎌は鎌田さん、下線がひいてある文章はインタビュー어의発言です。

人生の大半を図書館で過ごされたと言ってもいいかと思いますが、今までをふりかえってどうでしょうか。

永: あっという間で、「楽しかった!」の一言に尽きます。楽しくなかったらこんなに永く続かないし、図書館の仕事が好きという気持ちだけでした。

鎌: 私もあっという間でした。採用時から図書館配属の永野さんと違い、一般部局から異動してきたので、最初は図書館でどう動いたらいいのかわからなく、とにかく前任者の仕事を変えずに引き継ぐことに専念しました。

永: 鎌田さんは1年目から児童図書の担当になり、しかも前任者は退職していなく、大変だったと思います。楽しい思い出ばかりだけど、講演会などでの講師とのやり取りは緊張した記憶があります。

鎌: 昔は作家さん本人と直接交渉だったので、私もとても緊張しました。

永: 今は出版社に間に入ってもらいますが、当時は住所録を見て直接お手紙を出したので、返事が届くまでとてもドキドキしていました。

鎌: かこさとしさんや矢玉四郎さんから直筆でお断りのお手紙が届いたときは、残念な気持ちが大きかったのですが、貴重なものをいただいってしまった!と興奮したことを覚えています。

参加した講演会の終了後に講師を出待ちをし、直談判したことなど思い出は尽きないです。

永: 講演会は講師の依頼や当日の運営など、大変なことも多いですが、作家のお話を直接聞くことができる貴重な機会なので、やりがいもありました。

図書館で仕事をしていた中で、特に印象深い思い出などありますか。

永：一番印象に残っていることは、おはなし会を始めたことです。東京子ども図書館の研修に参加して、すぐに実践しました。昭和 60 年 1 月から開始しましたが、当初はおはなし会を行った日の終業後におはなし会の勉強会をしていて、ほぼ毎週新しいおはなしを勉強会で発表していました。今では考えられないけど、若いからできたのでしょうか(笑)

鎌：毎週新しいおはなしをおぼえるのはすごいことです！

永：やる気と熱意だけで動いていたような気がします(笑)

そのおはなし会が開始から 1 度も日にちも時間も変えることなく、しかも語り手が職員のための体制で今日まで続いていることはとても嬉しく思うし、今後もこのまま続けてほしいと思います。

あと、ヤングアダルトのコーナーを新設したこともとても記憶に残っています。日本で初めてヤングアダルトコーナーを設置した江東区の図書館員へお話を聞きに行き、すぐに実践しました。

その他は、図書館のことを広く知ってもらおうと、この「図書館だより」の発行も始めました。

わたしは図書館の隣の小学校に通っていたので、学校帰りにおはなし会へ参加したことを覚えています。あと、永野さんが編集されていたと思うのですが、当時発行されていた「子ども新聞」の投稿欄に『11 ぴきのねこ』のイラストが掲載された思い出があります。

鎌田さんは 2001 年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」を受けて、夏休み期間を利用して子ども向けのイベントを始めましたよね。

鎌：図書館を小さい頃から知っていることは人生を豊かにすると思ったので、夏休みに小中学生を対象にしたイベントを開催し、普段は来られない子にも図書館を知ってもらおうきっかけになればいいと思って始めました。工作教室を始めたことも、子どもたちが足を運びたくなるようなことを図書館でやろうと思い、とにかく図書館を知ってもらおうと思い、いろいろ企画しました。

人生の中に本の存在を位置付けるには、環境が重要だと思っています。

来年度からブックスタートは図書館を会場にして実施する予定と聞いて、保護者には負担が増えてしまう面があるかもしれませんが、赤ちゃんと保護者に図書館へ足を運んでもらうということはすごくいいことだと思います。

永：まずは図書館に来て、児童室を見てもらうことが大事だと思います。



80 周年を祝して開催された阿川佐和子さんの講演も大盛況でした

大変だったことやつらかったことはありましたか。

永：あまりつらい思い出というものはないのですが、80 周年記念事業の年は大変でした。郷土資料室の担当をしながら、記念誌を作成し、記念講演会やパネル展を開催して、ヘトヘトになった記憶があります。

鎌：あの頃は、私と永野さん以外のおはなし会を担当していた職員が他部署へ異動してしまい、館のおはなし会、保育園のおはなし会、小学校のおはなし会などをすべてふたりで担当しました。今思い出してもとても過酷でした。

永：あの数年は本当に大変でした。

そのような大変な時期も乗り越えられてきたおふたりですが、どのような図書館をイメージして仕事をしていましたか。

鎌: みなさんに来てもらう“まちの図書館”を意識していました。背伸びせずに気楽に来ることのできる場所、そしてみなさんの心の拠り所となってもらえるといいなと思っていました。

永: イメージと言われると言葉にしにくいですが、木更津市立図書館に来たいと思って来てくれている人は、職員が思うより多かったのではないかと思います。多くの図書館がある中から選んで来てもらえた、そんな風に思います。

鎌: カウンターでの対応が温かいとお褒めの言葉をいただいたこともありました。何気ないやりとりも利用者の心に沿うことができていたのかなと思うと嬉しく感じます。

永: レファレンスにも通じるのですが、司書として利用者と会話をしてコミュニケーションを取ることがとても大事だったように思います。雑談が雑談で終わらないというか、こちらも勉強させてもらったし、なにより利用者を知ることができたと思います。

鎌: それはわたしも思います。何気ないやり取りから、その人の人生を知ってしまうこともありました。36万冊の蔵書を全部把握することは大変ですが、窓口でのやりとりで利用者から本の情報をもらえる事は貴重でしたね。

利用者を知ることが図書館サービスの基本ですね。

永: 20年前位までは、カウンターの周りに学校帰りの子どもたちが群がっていた記憶があります。フロアに出れば後をついてきた子どももたくさんいましたが、最近はそういう風景がなくなってしまいました。

鎌: 社会の変化が大きいのでしょうか。しかし、当時おはなし会に参加していた子が大人になって図書館を利用してあげると、ああわたしたちの仕事は間違っていなかったと思えました。

永: おはなし会に来ていたいろいろな子の顔や名前が思い浮かびます。

鎌: 児童サービスという、未来への投資は大切だと思います。司書のみなさんには児童サービスはスキルがないとできないので、どんどん勉強してスキルを積んで欲しいと思います。わたしは図書館に配属になった初年度は、とにかく排架をして本を覚えることをがんばりました。児童室なら目を瞑っても排架できます(笑) 体が本の場所を覚えていたので、パソコンで検索するより早く本を探せました(笑)



さて、楽しい思い出話は尽きませんが、これからの図書館と図書館員に向けて一言お願いします。

鎌: 今のまま、地に足をつけながら精一杯やってもらえればいいと思います。永く続く運営と市民に喜んでもらえるサービスを忘れずに、まちの図書館らしくあってほしいです。

永: 市の直営体制で続くことを願っています。図書館の仕事は地味な仕事が多いですが、その仕事を地道に続けて、相手のことを考え、心でサービスをするような、そんな図書館であってほしいと思います。あとは、2029年の100周年記念事業を楽しみにしています。

では、最後に図書館らしく、本の質問をします。おふたりにとって大切な1冊を教えてください。

永:『赤毛のアン』(L・M・モンゴメリ // 著 講談社)シリーズです。中学校2年生のときに友達に勧められ、今でも定期的に読み返す本です。何十回と読んでいますが、未だに読むたびに新しい発見があります。

鎌:2冊ありますが、1冊は『人間の運命』(芹沢光治良 // 著 新潮社)です。これは、中学生のとき学校の図書室に新刊として置いてあり、その黒い表紙に目を引かれたことを強く覚えています。

もう1冊は『子どもだけの町』(ヘンリー ウィンターフェルト // 著 フェリシモ出版)です。これは小学校高学年で出会った本ですが、子どもだけで社会を動かせることに魅力を感じ、とてもおもしろく読みました。永らく絶版でしたが2004年に復刊され、とても嬉しかったです。



ありがとうございました。おふたりの図書館を愛する気持ちがとても伝わってくるインタビューでした。おふたりの熱い想いを聞いて、わたしもっとがんばろう!という気持ちになりました。



インタビューを終えて...

「図書館だより」で個人的なことを書いていいものか悩みましたが、インタビューのお礼を込めて、おふたりへ感謝の気持ちをつづりたいと思います。

おふたりと一緒に仕事できたことは、わたしの中でかけがえのない財産となっています。

永野さんは、カウンターと一緒に仕事をしているときに、知識の豊かさと天性のひらめきによって最適な資料が利用者へ提供される光景を何度も見ました。それは図書館の蔵書を知っているからこそできるサービスでした。後年になってわたしが児童室の担当を受け持ったときに、献身的にサポートしてくれたのも永野さんでした。

図書館勤務初年度、二度目の児童図書担当をされていた鎌田さんを慕い、児童図書担当見習いを自称したわたしはひたすら排架と本を知ることから始めました。あの1年で経験したことや学んだことが、わたしの図書館で働くことへのモチベーションとなっています。また、社会人1年生のわたしに娘のように接し、かわいがってくれました。

おふたりが図書館から卒業されてしまうことに大きな不安もありますが、おふたりが大切にしてきた、心でサービスをし、みなさんの心の拠り所になるような図書館であり続けるようこれからも努力していきたいと思っています。

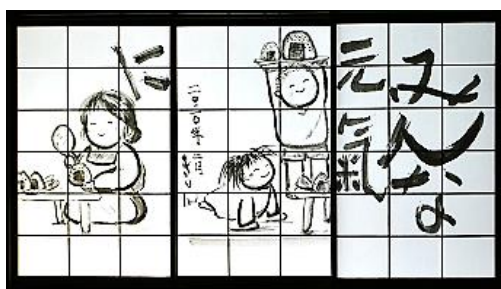


永い間、ありがとうございました。

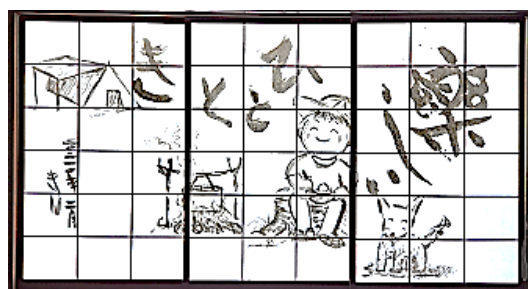
おふたりのこれからが、今よりもっと輝かしい日々であることを願っています。

(インタビュアー:石渡)

おはなしの部屋の障子絵が新しくなりました。 
今回も市内在住の童画作家である北原きりんさんが描いてくださいました。
毎年素敵な心温まるイラストをありがとうございます。



2020 年 10 作目
「みんな元気に」



2021 年 11 作目
「楽しいひととき」



図書館を使いこなそう
NO.34

はいか？わいえー？そうたい？？

図書館用語？？



図書館にはたくさんの図書館用語（専門用語）があります。

毎日「ハイカしてくるね」、「これはワイエーにする？」、「ソウタイの手続きをお願いします」、「オーパックの電源入れた？」などの言葉が事務室内を飛び交っています。

- ハイカは、排架と書き、資料を棚に分類番号順に並べることを言います。
分類番号も図書館用語ですが、背表紙に書いてある数字のことで、日本十進分類法という規則に従い、内容で数字が分かれています。（日本十進分類法も図書館用語ですね）
- ワイエー（YA）はヤングアダルト（Young Adult）の略で、児童と大人の間の世代を指します。最近では、ティーンズと表現している図書館も多くなりました。
- ソウタイは、相互貸借のことで相互協力とも言ったりします。他の図書館と資料の貸し借りをを行うことを言います。
- オーパックとは、Online Public Access Catalog の略で、オンライン閲覧目録と訳され、コンピュータ化された図書館の目録のことです。蔵書検索システムをイメージしてください。



ひとつの図書館用語を説明しようとする、その説明の中に複数の図書館用語が登場し、とてもわかりにくい言葉が多いです。

利用者みなさんにお伝えするときは、なるべく図書館用語を使わないように努めていますが、他の図書館から借りた資料を、つい「相貸本」などと言ってしまう場合があります。聞きなれない用語を耳にした場合は、お気軽に職員へお尋ねください。

わたしの思い出の1冊 ～記憶の中に深く刻まれている1冊をご紹介します～

「天才」 石原慎太郎 // 著 (F/イ)

図書館員 中山のなか

昭和を代表する政治家、田中角栄の業績を描いた小説です。

この本のことは中央公民館にいた頃、新聞の広告を読んで知りました。元々田中角栄が人間として好きだったので読むことにしたのです。

読み始めると、世間的には悪者とされることもある田中角栄の真摯な人間性が浮かび上がってきました。就学期には吃音によるいじめに立ち向かい、成人後は自ら土建工業を起こす。そして努力の末に政治家として大成するのです。私とは違う世界の人なのだと感じました。

角栄は多くの法律を議員立法として成立させました。また総理大臣に任命されてからは、外交でも大きな成果を上げていきます。しかし、この本によればロッキード事件に巻き込まれた後には政治を裏から支えようとするものの、病に倒れてしまい政界を引退するのです。

まだこの本を読んでない人には、この本から田中角栄の本当の姿を知ってもらいたいです。その上で、彼の続けてきた努力する姿を見習ってもらえたらと思います。

《レファレンス・トリビア》

Q 木更津市の郷土博物館金のすずにある旧安西家住宅について調べたいです。

A 小学生からのレファレンスです。旧安西家住宅については、「好きです！木更津」検定ガイドブック」がとてもわかりやすい紹介を載せています。豪農として400年も続いた安西家は、江戸時代には名主や組頭を代々務めたのだそうです。

また、小学生には内容が難しいのでこれは大人と読んでほしいのですが、『いしずえ』というきさらづ文化財ガイドボランティアの会の皆さんが書いた会報には、安西家のことが

詳しく載っています。例えば安西家の一番有名なお先祖安西三郎景益は、なんとあの源頼朝が戦に敗れて房総半島に逃げてきた際に、自らの館に招き入れて助けた人なのです（創刊号）！また、移築する前の旧安西家住宅の構造や平面図なども掲載されています（第9号）。

そして、旧安西家住宅を今の場所に復原した際の工事報告書は、正に今、復原がなされているという写真がダイナミックに掲載されていて、とても見応えがあります。ぜひご覧ください。



旧安西家住宅（市HPより）

参考図書

- 291 ス 『“好きです！木更津” 検定ガイドブック』 “好きです！木更津” 検定実行委員会 // 編集
222 イ 『いしずえ』（創刊号・9号） いしずえ編集委員会 // 編集
521 キ 『木更津市指定文化財 旧安西家住宅移築修理工事報告書』 木更津市教育委員会 // 編集

編集後記 春は別れと出会いの季節です。図書館も3月末で退職される方が3名います。今号はその3名からメッセージをもらう形で構成しました。おふたりにはインタビューを、もうひとかたには「わたしの思い出の1冊」をお願いしました。3名の先輩から学んだことを忘れず、今後も職員一同図書館の発展に向け、取り組んでいきたいと思ひます。ますますお元気にご活躍されることをお祈りしています。（めっち・マル）